

## 左官 堀美幸氏

明治時代から5代続く左官一家の末子として1987年に生まれる。2003年に技能五輪の左官職種に出場した兄の応援に行き、左官を目指す。魚沼テクノスクールで2年間学び、2007年、新潟で約140年続く老舗の建設総合企業、株式会社いりやまに入社。2007年11月、静岡県で開催された第39回技能五輪国際大会左官職種に出場し、女性初の銀メダルを獲得。

# 女性匠の感性が切り開く 伝統と革新、美の世界

壁や床など、伝統的な砂壁や漆喰からコンクリートやセメントまで、あらゆる素材を用いて美しく建物を塗り上げるのが左官です。近年では湿式工法の現場が少なくなり、左官職人も減少しています。そんな中、伝統的な日本建築でも定評のある建設会社「株式会社いりやま」でただ一人の女性左官として腕を奮う堀美幸さんに左官の魅力と醍醐味について語っていただきました。

### 技能五輪の兄の姿に触発され、左官職人の血に目覚める

堀さんは、幼い頃から左官職人である祖父、父の背中を見て育ちました。左官は、夏は40度を超える壁の照り返しの現場、冬は雪が降る厳しい寒さに耐えつつ「こて」を使わなければいけません。体力的にも上下関係も厳しい職人の世界。左官一家に育ったとはい

物を語ります。

左官は漆喰に始まり、漆喰に終わると言われます。スピードを意識しながら、丁寧に塗り重ねていく日本独自の伝統工法です。一見何気ない滑らかな仕上がりに、職人のこだわりと技が隠されています。

### 呼吸する壁 漆喰を自在に操る

断熱遮音・耐火・調湿と様々な機能に優れた漆喰仕上げは「呼吸する壁」とも呼ばれ、土蔵や町家などに多く普及しました。石灰に、海藻糊とスサ（※1）を混入し、珪藻土を配合すると漆喰になり、骨材を混入すれば砂漆喰になります。骨材の材質、粒径、加入量を変化させれば、様々な砂漆喰ができ、顔料を混入すれば多様な彩りの変化を見せられます。

塗られた壁に刷毛や木鏝、発泡スチロールなどでテクスチャー（素材感）を創れば、壁の表情は無限に広がります。



<下塗り>  
下から上、次に縦、横と、こすりつけるように塗り重ねる。



<仕上げ(上)塗り>  
写真上／下塗りより1.5mmほど厚く重ねる。鏝に全身の力を込めて壁を押し付ける。写真中／指先の感覚を頼りに、壁の厚さが均一になるように仕上げる。写真下／磨き抜かれた白壁の表面は顔料が写るほどのツヤが出る。



<完成・確認>  
壁にライトを当て、兄の健春さんと表面の凹凸をチェックする美幸さん。



素材の乾き具合を見ながら時間を置かず塗り重ね、層の厚さを均一にする。（新潟市の戸建住宅の漆喰仕上げの現場で）

す。漆喰を極め、壁を自在に表現することは、建物を仕上げる左官だけに与えられた醍醐味なのです。

### 鏝が手に馴染むことで 左官の熟練した技に辿りつく

左官にとって命ともいえる道具が鏝です。鏝は壁の部位や素材により、何種類も使い分けます。セメントやモルタルなどには木鏝。漆喰には柔らかい地金を使って何十回も押し、塗りムラをなくします。鏝の選び方にも職人の好みがあり、同じ壁の仕上げでも兄健春（たけはる）さんは「大津通し」という細身の硬い鏝を使いますが、堀さんは柔らかいステンレスの角鏝を使っています。柔らかいタッチと光沢を出すために直接手を使った「手こすり」で仕

上げる場合もあります。鏝が自分の手の一部のように馴染むには、気の遠くなるような繰り返しが必要です。

堀さんは「練習では怒られた記憶しかない」と言われます。左官の仕事は男女差なし。甘えも妥協もなし。時に緊張に息が詰まり、苦しくなることもあります。しかし、「自分のイメージと仕上げがピッタリと合い、壁が美しく仕上がった瞬間の満足には変えられない」と魅力を語ります。仕事の緊張感を持続させるためにも休日には街でシヨッピングを楽しむなど「ONとOFFの切り替え」を大切にしています。

### 住まいをキーワードに 世界に広がる 日本の左官技術

堀さんは左官として現場に出てま

え、自分が左官になるとは考えていませんでした。  
堀さんを左官への道に導いたのは技能五輪で活躍する2人の兄の姿でした。壁と向き合い鏝をふるう姿を見て「カッコイイ！」と感動。この時、堀さんの中に眠っていた左官の血が目覚めたのです。高校を卒業後の進路は迷わず、左官の技能五輪選手を育成した名門、新潟県立魚沼テクノスクールの門を叩くことになりました。

### 技能五輪左官職種 女性初の銀メダル

堀さんは「女性であることがハンデになるとは思いません。むしろ、好きで左官を選んだのだから」と、敵しいのは当たり前だと受け止めています。技能五輪国際大会では、左官職種女性初となる銀メダルを獲得。その課題の一つでもあった「漆喰」仕上げが技術の高さ

だ半年。気象条件でも鏝の走りや壁表面の表情が変わるため、その時々湿度や温度の変化に合わせて技を変化させなくてはなりません。壁と向き合う時はただ無我夢中。堀さんは「自分はまだまだ成長段階」と言われますが、堀さんが仕上げた壁に繊細な美しさを感ずる人も多く、指名で仕上げを依頼するお客様もいます。もちろん勤めている株式会社いりやま様でも、日本の伝統的工法である漆喰仕上げを現代の住宅に広げていきたいと考えておられます。

堀さんは漆喰の壁が少なくなっている現代だからこそ、あえて住宅にこだわりたいと話します。

「天然素材を用いた漆喰の壁の風合いや硬化して壁の色が微妙に変化していく様子など、住む人に建物も生きていくことを感じてほしい」と語る堀さん。

左官の匠に求められるのは、伝統的な技術に、堀さんのような瑞々しい感性と現代の建築に合わせた新しい技術なのかもしれません。



細長いくり鏝、丸い形のれんが鏝など用途により豊富な種類がある。



漆喰を鏝板(こていた)にのせて持つ。



技能五輪で作成した漆喰塗装と石膏彫刻(レリーフ)の複製。「将来、鏝絵(こてえ)（※2）も手掛けてみたい」と堀さん。  
（※2）鏝絵(こてえ)…漆喰装飾の一つで、民家の壁や土蔵の扉などに鏝で絵を描いたもの。